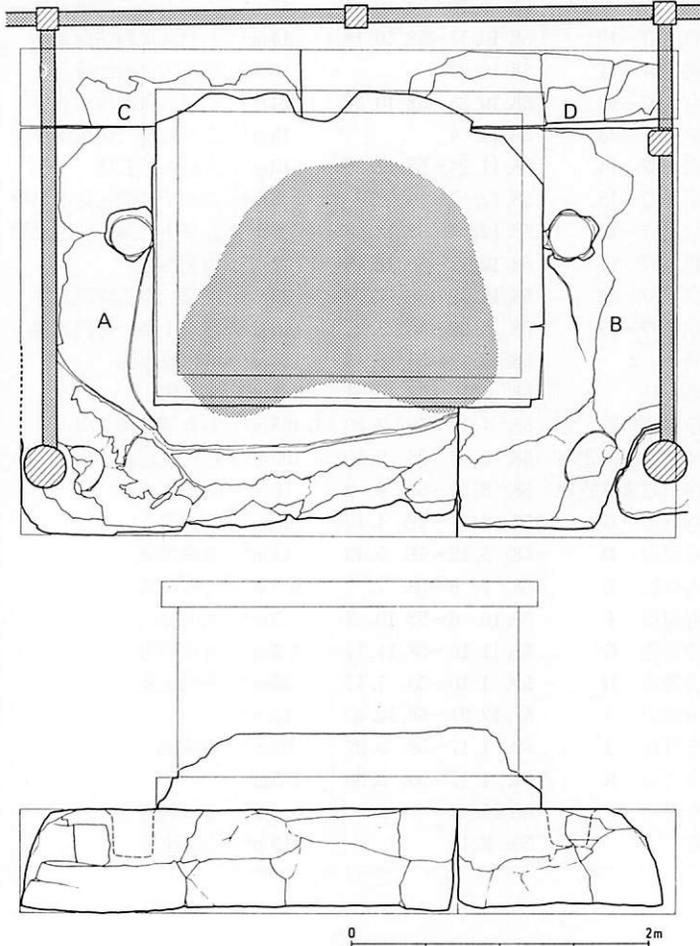


## 飛鳥寺旧本尊台座の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥寺中金堂の旧本尊は建久7(1196)年の火災により頭部および右手の一部を残して造像時の大半を失い、現本尊の大部分は後世の補鑄によるものである。現在は凝灰岩を粘土で塗り固めた仮設の台座上に安置されているが、その下には巨大な切石を組み合わせた台座が存在することが知られていた。昭和31年の台座の調査では、本尊両側に裳裾が当たったとみられる痕跡や、光背を支えるためと考えられる台座背面の枿、両脇侍を安置するためと思われる枿穴の存在などが確認されている。

今回、安居院本堂の部分解体修理工事にともない、本尊の現仏壇も同時改修されることになり、前回調査し得なかった台座前面と仮設台座を中心に、簡単な実測調査と写真測量を実施する機会を得た。その結果、二・三の新知見を得たのでその概要を紹介する。



飛鳥寺旧本尊台座復原図

台座の調査 これまで仮設台座下の石造台座は花崗岩製とされてきたが、石棺などにも使用例の多い流紋岩質溶結凝灰岩(竜山石、兵庫県高砂市産出)の切石を組み合わせていることが判明した。切石は大中小の4箇(A~D)からなると推定され、各石とも上面は仮設台座の周囲に当初の面をよくとどめている。しかし、周辺部には焼損による剝離や亀裂が著しく、また、現本堂に先行する再建建物の柱を据えた円形の柱穴や、現本堂の柱を立てる際の前面両隅の破壊などにより、四周の遺存状態は余り良好ではない。なお、台座上面の調査で

は、裳裾が当たったとみられてきた本尊両側の痕跡も、亀裂や剝離であることが判明した。

台座を構成する各石の法量は周囲の壁によって必ずしも正確には計測しがたいが、最大のAが東西2.92m・南北2.69m、Bが東西1.39m・南北2.66m、CとDについては前回の調査結果と照合すると、東西1.88m・南北0.51mのほぼ同形同大の数値が得られる。したがって、台座全体の規模は、一応東西4.31m・南北3.2m・高さ0.67mに復原できる。なお、台座下の状況については、上面が削平されてはいるものの中金堂の基壇上に台座が直接据えられていることが前回の調査で判明しており、今回の調査でも、各石の配置や水平位置に乱れが認められず、台座は創建時の基壇上に旧位置を保つことを再確認した。

**須弥座の調査** 現本尊が安置されている仮設台座については、いわゆる練石(凝灰岩)を積み重ねていることが判明していたが、漆喰や粘土が上塗りされていることもあって、詳細な調査はなされていない。今回の調査では台座と同じ竜山石を用いていること、破損してはいるが、両側面と背面に下框および腰部の立ち上りが部分的に遺存していることなどを確認した。須弥座は台座の中央やや後方に寄せて据えられており、遺存状態の良好な箇所を計測すると、その下框の平面規模は東西2.58m・南北2.05mの長方形を呈する。下框の高さは約21cm・奥行は約14cmを測り、ほぼ垂直に立ち上る。この立ち上りを腰部へ連なるものとして腰部の平面規模を復原すると、東西約2.3m・南北約1.77mとなる。ただし、この立ち上りが下框をもう一段重ねたとする見方もできるが、現状での確認はむずかしい。高さについては現本尊下で台座上約50cmまで遺存していることを確認した。本尊が安置されており、粘土の上塗りにさまたげられてこれ以上の調査は無理であるが、亀裂や剝離が著しいものの、おそらく一石からなるものと推定され、法隆寺釈迦如来坐像などの意匠からみて、須弥座の高さはさらに高く、かつ1段ないしは2段程度の上框を有する簡素な宣字形須弥座であった可能性も考えられる。なお、須弥座右の衲穴(直径・深さとも約30cm)は下框に接して穿たれており、これを両脇侍の台座を固定するためのものとする、脇侍が須弥座に接近しすぎるきらいがある。しかし、法隆寺釈迦三尊像やその他の小金銅仏にみられるように、捻転する蓮茎と蓮華座からなる台座上に脇侍が立つものとするれば、配置にも問題がなくなる。

今回旧位置を保つことを再確認した切石を組み合わせた台座は、中金堂の基壇上に据えられており、その意味では須弥壇の役割を兼ねているという見方もできる。しかし、通常の内陣全体の広さにくらべると、ほぼ中央間一間分相当の大きさしかなく、その意味ではやはり二重の台座を構成する下座とみるべきであろう。その場合、中金堂基壇上面が若干削平されているので、旧内陣一杯に下座の下半を覆う低い須弥壇が作られていた可能性も考えられる。とすれば、二重宣字形台座の下座上に脇侍が立ち、上座に本尊を安置するという法隆寺釈迦三尊像の構成の原形ともいえる意匠がうかがわれて興味深い。とはいえ、今回の調査結果だけではこれ以上の問題は解決しえず、台座全体の精査や、台座周囲の調査と併せ、将来の本格的な総合調査にまたれる点も多い。

(木下正史・大脇 潔)